



特別支援学級に通う子ども達も一緒に！

オリンピック・パラリンピック教育のあり方を考える



2016年のノーベル医学・生理学賞が、東京工業大の大隅良典栄誉教授に授与されました。大村智北里大学特別栄誉教授のノーベル医学・生理学賞受賞に続き、日本のノーベル賞受賞は3年連続で計25人。日本人が世界で活躍する姿を見るたびに、明るい日本の未来を想像します。「明るい未来」は教育により実現します。平成27年度、本区における教育新規事業は小中学校における「オリンピック・パラリンピック教育の推進」です。学校で、本物のオリンピックやパラリンピックの話を授業で聞き、帰宅した時の子どもたちの表情は格別でした。未来への希望と、いろいろなことに挑戦する大きなモチベーションがわいてくるのだと思います。

一緒に日本を再生しよう！

入党資格

- ①我が党の綱領・主義・政策などに賛同される方。
- ②満18歳以上で、日本国籍を有する方。
- ③他の政党の党籍を持たない方。



自民党

パラリンピック教育について

障害のある方が、障害を乗り越えて、あるいは障害を受け入れてスポーツの記録に挑む、この姿に心を動かされます。障害を、より乗り越えやすくしたり、乗り越えて活躍することを支援するのは、国や都が法整備や条例という枠組みを通じて行うべきことです。しかし支援があるからといって、障害を持つ方にとっては、チャレンジすることへのリスクが減るとは限りません。決してそれだけで世界と戦えるものではなく、選手はみんな様々なリスクを遂取っていらっしやいます。

リスクを遂取って前に向かって進んでいく。この勇気やひたむきさを子ども達に伝えたいし、これが「パラリンピック教育」の目指すところだと思えます。

中央区版「一校一國運動」について

もともとは、1998年の「長野・冬季オリンピック」が発祥です。大会の2年前から長野市でスタートしましたが、さらにさかのぼると、広島市が1994年アジア競技大会にあわせて行った「一公民館一國」の応援運動でした。小さなひとつの公民館が、オリンピックに出場する一カ国を応援しようという運動が、このように世界中に広がりました。中央区においても、各小中学校はともちいさな存在かもしれませんが、ここから日本中に、世界中に広がってほしいと思えます。

来る2020オリンピック・パラリンピック東京大会においては、特にパラリンピック



特別支援学級に通う子ども達の切絵

グレイゾンの子ども達の不安な進路について

中学校で特別支援学級に進学すると、特別支援学級にはいわゆる「内申書」が存在しません。「内申書」がないと、全日制・定時制高校ともに、出願の要件が満たされず、進学の道が非常に困難となります。そこで高等支援学校に進学しようとする、知能判定値が70前後のグレイゾンの子ども達は「愛の手帳」を所持していませんので、ここでも入学が困難であるとのことです。それならば就労はどうか？ という、これも「愛の手帳」を所持していない場合は、障害を持つ方向への就労支援を受けることが本当に困難であるそうです。

特別支援学級の今後の展望、あり方について

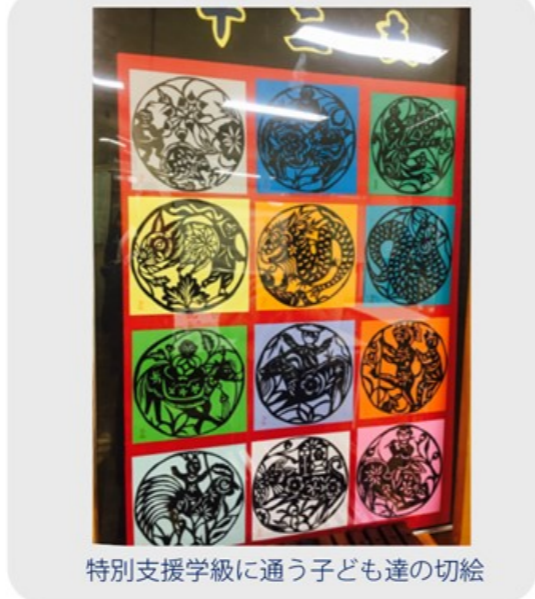
教科ごとに得意と不得意がくつきりと分かれていらつしやる場合、地理が得意であれば社会はとことん力を入れ、とにかく伸ばしてあげられる教育体制を整えるべきと考えます。また、絵を描くことや音楽が好きであれば、それらを保護者と一体になって伸ばしてあげる。このことが将来の自立のための一歩となるように、できる限り個々の事情に合わせた教育を行ってほしい。このことを平成28年度の決算特別委員会の席上で強く要望しました。今後も「区民文教委員会」の一員として、教育行政をより良いものにするために精一杯がんばって参ります。

特別支援学級について

区内の児童生徒の人口増に合わせて、今後は特別支援学級に通う子どもも増えると予測されます。

現在、特別支援学級は明石、月島第二、銀座中学の三校にあります。さらに「特別支援教室」を、平成28年度に区内9小学校で導入し、平成29年度に向けて全小学校に開設し、現状の「通級指導学級」は「特別支援教室」に切り替わる予定となっています。

特別支援学級は、障害をもつ児童生徒とともに、「愛の手帳」を所持しないが、知能判定値が70前後の、いわゆる「グレーゾーン」の子ども達も一緒に学んでいます。そういった子ども達は、地理、例えば新幹線の駅に大変詳しい、絵を描くのが大好き…と得意な教科がある一方で、計算はとても苦手、といったことがあります。



特別支援学級に通う子ども達の切絵

そこで、内申書が出願要件となっていない都立「チャレンジスクール」への進学があるのですが、「チャレンジスクール」を卒業した後、再び、就労や進学への道、さらには自立への壁に突き当たってしまう…。グレイゾンの子ども達の自立はとても難しく、さらに親亡き後に立派に生きてほしいと願う保護者にとっては大変困難な状況であろうと思えます。



中央区立知的障害者生活支援施設レインボーハウス明石1Fのパン



先月から立ち上げました「ママ・ミーティング」では、子育て・教育・暮らしのお悩みを本音でトークできる場として中央区在住の子育て世代のママたちが集まっています。参加ご希望の方は、お気軽にご連絡ください！